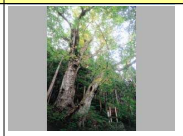
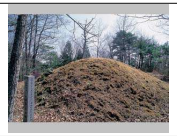
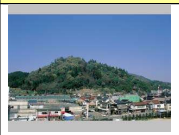
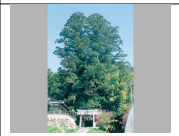
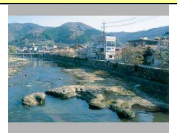
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	重要文化財（建造物）	円通寺本堂 附　厨子　1基	えんつうじほんどう	1棟	庄原市本郷町甲	昭33.3.13（県指定） 昭37.6.21	本堂／桁行三間，梁間三間，一重，入母屋造，銅板葺 厨子／一間厨子		戦国時代の天文年間（1532～55）に山内直通が再建したと伝えられる。三間三面脇仏壇付の禅宗様仏殿として一応の形を整えている。扉は框（かまち）の中央に稜線があるもので古式である。厨子もまた整然とした禅宗様の優秀なもので，おそらく当初からのものであろう。 円通寺は，地毘庄（じびのしょう）地頭として鎌倉時代末期（14世紀前半）に入部した山内首藤（やまのうちすどう）氏が本拠の甲山城中腹に建てた菩提寺である。		
国	重要文化財（建造物）	堀江家住宅	ほりえけじゅうたく	1棟	庄原市高野町中門田字城山下	昭41.12.5	桁行19.8m，梁間10.5m，一重，入母屋造，茅葺，		創建時期は明らかでないが，17世紀後半から18世紀前半とも伝えられる。古い農家の間取であった三間取りの痕跡がたどれる貴重な遺構であり，古い農家の形態をよく保存した数少ない例である。後年，座敷と納戸のあたり，それに引き続いて中の間が再度付加されてきていることなど変遷の跡が見えるとともに，素朴さと力強さがある。また釘を使っていないことなど民俗文化財としても貴重な資料となっている。		
国	重要文化財（建造物）	荒木家住宅	あらきけじゅうたく	1棟	庄原市比和町森脇	昭43.4.25	桁行20.6m，梁間10.9m，入母屋造，茅葺		構造及び細部の手法から江戸時代中期，17世紀末から18世紀初めの建築と考えられる。比婆郡高野町の堀江家住宅（重要文化財）と梁の組み方は似ているが部材の形はやや新しい。平面は全体の半分を占める土間及び「だや」と床上五室からなっていて，その中の「たかま」は，床を一段高くして神を祀った部屋であり，神官の家としての特性を示している。 荒木家は中世末（16世紀）からこの地へ住み，神官であった。		
国	重要文化財（工芸品）	赤糸威鎧（兜・大袖付）	あかいとおどしよろい	1領	庄原市山内町	昭45.5.25	黒漆塗本小札・威毛緋糸・立挙前二段・後三段・長側四段・草摺脇楯とも四間五段・金具廻革所獅子牡丹文染韋包・脇楯壺板・大袖七段・笄金物付・兜鉄阿古陀形黒漆塗四十六枚張四十二間筋鉢・[849]五段・鍬形・吉字透前立・栴檀板付・鳩尾板欠	胴高33.5cm，胴廻87cm，大袖高47.5cm，大袖巾35cm，兜鉢高12.5cm，兜鉢《けい01》22cm	日吉神社は，鎌倉時代（1192～1332）に関東から地頭として西遷し土着した山内氏の崇敬が深く，この鎧は永禄元年（1558）に甲山城主山内首藤隆通が奉納したと言われる。脇楯を付け四間の草摺（くさずり）を垂れた鎧で，小札頭（こふだがしら）が尖（とが）りごころで胴は下窄り，阿古陀形（あこだがた）の筋兜などから見て室町時代（1333～1572）における末期式正鎧の特色が強い。鳩尾板を欠失するが，当初の状態を保って伝存することは珍しく貴重で，かつ製作精緻で技巧も優れている。		
国	重要無形民俗文化財	比婆荒神神楽	ひばこうじんかぐら		庄原市東城町	昭54.2.3			荒神社の式年に行われる大神楽で，秋から冬にかけて行われる。かっては四日四晩にわたって行われていたが今では日を短縮して行われることが多い。ほかに，二日一晩の小神楽も行われている。 この荒神神楽を演じる場所は，もとは田の中などに高殿（こうどの）を仮設し，それを主舞所としたが，今日では高殿のかわりに民家や神社の拝殿を用いることが多い。 祭の中心を担う当屋（頭屋）に荒神を迎え，土公神や荒神関係の祭りを行い，その後，高殿に移り「七座神事」「神能」（大蛇退治・大社など）をはじめ，五行舞・竜押し・神懸り託宣・荒神送・灰神楽などを執り行う。 この神楽は，地方的特色をよくあらわした貴重なものである。		
国	重要無形民俗文化財	塩原の大山供養田植	しおはらのだいせんくようたうえ		庄原市東城町	平14.2.12			備北地方には大山信仰による供養田植が残っているが，その中で最も古い形を残しているのがこの大山供養田植である。 この田植は，大山小屋を作り，神仏混淆の祭式によって牛馬の供養とその安全を願う大山神社の信仰に基づくもので，代掻き（しろかき）達は花宿から繰り出す飾り牛を追いながら，牛追掛けを唄い，早乙女は石神社にて田踊りをおどり，唄いながら花田へと行進する。飾り牛は大山下小屋を潜って代を掻き，早乙女はサゲ棟梁の指揮の下で太鼓に合わせて揮秧（そうおう）する。この形式は非常に古く，備北地方で中世以来行われていたと思われる姿をよく伝えている。		4年毎に開催
国	史跡	寄倉岩陰遺跡	よせくらいわかげいせき		庄原市東城町帝釈未渡字寄倉	昭44.4.12			帝釈峡の石灰岩地帯では，昭和36年（1961）の調査以降石器時代の岩陰・洞窟遺跡が多数分布することが明らかとなった。なかでも寄倉岩陰遺跡は，帝釈始終地区の東端，帝釈川左岸に位置し，西面した石灰岩の岩陰にそって，長さ30m，幅15m以上の規模をなしている。縄文時代から鎌倉時代（1192～1332）にわたる遺物を出土しているが，とくに縄文時代（紀元前約1万年前～紀元前300年頃）の文化層が厚く，縄文時代早期から晩期にいたる各種の遺物が，きちんとした層序をなして出土しており，中四国地方の縄文土器編年の基準となる重要な遺跡である。縄文時代後期末から晩期にかけての文化層では，約50体にのぼる人骨が集積された状態で検出されている。		関連施設：帝釈峡博物展示施設「時悠館」（08477-6-0161）
国	史跡	佐田谷・佐田峠墳墓群	さだだに・さだだおふんぼぐん		庄原市宮内町・高町	令和3.10.11			佐田谷・佐田峠墳墓群は，弥生時代中期末から後期前葉（紀元前１世紀～１世紀頃）にかけて築造された，四隅突出型墳丘墓３基，方形台状墓４基，方形周溝墓１基の８基からなる墳墓群である。西城川左岸の標高約３００ｍの低丘陵頂部，およそ東西２５０ｍの範囲に３群にまとまる形で造られている。 弥生時代中期末には古相の四隅突出型墳丘墓を含む多様な形態の墳墓が，墓坑の掘削・埋葬と墳丘の盛土を繰り返すことで徐々に構築されている。また，墓坑は並列に配置され，主に在地系の土器が周溝に据えられる。その後，弥生時代後期初頭以降には境形は方形台状墓が主となり，墳丘の構築後に墳頂部から墓坑が掘り込まれるようになる。また，大型墓坑を中心に，周囲に他の墓坑が配される墳墓が現れるなど，明確な中心埋葬がみられるようになる。それに加えて吉備系の土器が使用され，墓坑上に土器が供献されるようになる。 日本列島において首長墓が出現する弥生時代中期から後期にかけて，墳丘築造と埋葬の関係，埋葬施設の配置，墳墓祭祀の変遷が同一の墳墓群の中で明らかになった事例であり，地域間関係の展開と有力者集団内の構造の変化の実態を知る上で重要である。		関連施設：庄原市歴史民俗資料館（庄原市田園文化センター内、0824-72-1159）
国	名勝	帝釈川の谷 （帝釈峡）	たいしゃくかわのたに（たいしゃくきょう）		庄原市東城町，神石郡神石高原町	大12.3.7			高梁（たかはし）川の上流にある石灰岩峡谷で，浸食によって諸所に天然橋や洞窟が形成されている。わけても峡谷に架せられた雄橋（おんばし）（長さ65m，幅12m，高さ30m）は，天然橋としては世界有数のものである。帝釈峡にある多くの石灰岩洞窟のうち，白雲洞は鍾乳石（しょうにゅうせき）や石筍（せきじゅん）が林立して壮観である。この地一帯を形成する石灰岩には，紡錘（ぼうすい）虫・サンゴ・ウミユリなどの化石が含まれており，断魚渓（だんぎょけい）付近では，サンゴの化石があざやかに観察される。なお，峡谷には，アルカリ性土壌のみに生ずるイチョウシダ・ツメレンゲ・イワシデなどの石灰岩植物が多い。		関連施設：帝釈峡博物展示施設「時悠館」（08477-6-0161）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	天然記念物	熊野の大トチ	くまののおおとち		庄原市西城町熊野	昭33.2.6			トチの木は，わが国の山地に分布する落葉高木で，かなりの大木となる。時には人家に植えられたり，街路樹に使用されることもある。 本樹は，大羽川の左岸の川岸斜面に立っており，根元は空洞となっているが樹勢は盛んである。根回り周囲12.20m，樹高約30mで，根元から2本の支幹（目通り幹囲9.60m，5.50m）に分れているが，全国有数の巨樹である。		
国	天然記念物	比婆山のブナ純林	ひばやまのぶなじゅんりん		庄原市西城町油木，比和町三河内	昭35.7.15			ブナ林は日本の冷・温帯に発達する代表的森林である。中国地方のブナ林は，海抜約900m以上に発達すると言われているが，山地が一般に低く，早くから開発されたので，背梁部の高く険しい山々でないとブナ純林を見ることができない。広島県の北東，島根県境にある比婆山は標高1,264m，伊那美尊(いざなみのみこと)の墳墓の伝説をもつ御陵地（県史跡）で，頂上部から山腹一帯約23haの区域にブナ林が茂っている。頂上付近には老大木も少なくなく，純林としての林相がよく整い，わが国西部におけるブナ林として有数のものである。		
国	天然記念物	船佐・山内逆断層帯	ふなさ・やまのうちぎゃくだんそうたい		三次市畠敷町二本松 庄原市山内町深田山 安芸高田市高宮町佐々部	昭36.5.6			船佐・山内の逆断層帯は，第四紀（約200万年前～現代）の地殻変動を示すものである。 船佐の逆断層帯は，高宮町佐々部(ささべ)植谷（うえたに）を中心として東西2kmにわたって点々と露頭（ろとう）があり，基盤岩の中生代の白亜紀（約1億4300万年前～約6500万年前）花こう岩が新第三紀中新世（約2500万年前～約520万年前）の備北層群（びほくそうぐん），およびその上に不整合にのる第四紀初期の甲立礫層（こうたちれきそう）の上に，北に30度傾斜する低角度で衝上している。 山内の逆断層帯は，三次盆地北辺から庄原市山内町まで16kmにわたって山麓に連続して追跡され，古い基盤のひん岩とその上に堆積した第三紀中新世備北層群の基底礫岩層が上位の備北層群砂岩層上に押し上げられている。 この逆断層が第四紀以後の新しい断層で，中国山地や瀬戸内海形成史上，貴重な資料である。		
国	天然記念物	雄橋	おんばし		庄原市東城町帝釈，帝釈未渡	昭62.5.12			雄橋は,名勝帝釈川の谷（帝釈峡）にかかる石灰岩の天然橋である。全長約90m,幅約18m,厚さ約24m,河床よりの高さ約40mであり,鍾乳洞の一部が残されたものと考えられる。橋背に小径があり,かつて東城から庄原へ通じる旧街道となっていた。規模も雄大で学術上貴重な存在である。		
県	重要文化財（建造物）	宝蔵寺宝篋印塔	ほうぞうじほうきょういんとう	1基	庄原市本町	昭30.9.28	花崗岩製	高さ1.8m	この塔は，地臣庄（じびのしょう）の地頭山内氏の祈祷所であった宝蔵寺にある。基礎に延文4年南呂（1359・8月）という北朝年号をもっているが，上下町安福寺の南朝年号の宝篋印塔と共に，当時のこの地域の情勢を知る資料となる。		
県	重要文化財（建造物）	寿福寺禅堂	じゅふくじぜんどう	1棟	庄原市東城町新免	昭59.1.23	宝形造，茅葺，方三間の土間の堂，内部和様仏壇		室町時代後期（15世紀後半～16世紀後半）の和様の禅堂である。方三間の土間の堂で，現在は宝形造の特異な屋根が乗っている。天井の低い住宅風の優れた意匠をもったものである。堂の柱は円柱で，外側に廻縁の付いた痕跡があり，上部には舟肘木（ふなひじき）を使用している。もとは寺の裏の高台にあったものをここに移したといわれ，相当の改造を受けているが，柱，舟肘木，天井，天井長押，仏壇来迎壁等は完全に残っている。 内部の装飾，特異な屋根の形式，中世遺構のまったくない曹洞宗の中世の仏堂であるなど，芸術的にも学術的にも貴重な建築物である。 寿福寺は帝釈峡近くの山間にある曹洞宗寺院である。同町内の徳雲寺未寺として戦国時代の天文3年（1534）に創められたという。		
県	重要文化財（絵画）	紙本著色宮景盛像	しほんちゃくしょくみやかげもりぞう	1幅	庄原市西城町栗	昭45.5.14	紙本著色，軸装	縦84cm，横43cm	戦国時代の永禄10年（1567）に描かれた西城宮氏の当主・宮景盛の肖像画。西城宮氏は，備後に勢力をもった有力な国人領主・宮氏の庶家である。久代（東城町）を本拠としていたが，宮高盛の時に西城大富山城に拠点を移した。 宮上総介景盛は高盛の孫にあたり大富山城の第二代城主である。画の上部には浄久寺二世の覚海禅師の寿像讃があり，それには宮氏は本来藤原姓であるが，高盛の時代に源姓を称したことが記されている。 浄久寺は宮高盛が創建した曹洞宗寺院であり，宮氏の菩提寺であった。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色覚海禅師像	けんぽんちゃくしょくかくかいぜんじぞう	1幅	庄原市西城町栗	昭45.5.14	絹本著色，軸装	縦92.5cm，横47.5cm	浄久寺は，備後における曹洞宗の巨刹徳雲寺（東城町）の第二世鼎庵宗梅（ていあんそうばい）が，宮高盛を開基檀那として建てた寺である。覚海はその浄久寺第二世で，画は天正8年（1580）に宮景盛が寄進したこととともに覚海禅師自賛の七言律詩が記されている。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色藤原盛勝像	けんぽんちゃくしょくふじわらもりかつぞう	1幅	庄原市西城町栗	昭45.5.14	絹本著色，軸装	縦88.7cm，横37.5cm	安土桃山時代の天正10年（1582）12月作。西城宮氏一族であった藤原盛勝の肖像画である。盛勝の没後，彼の子の盛和が描いたもので，浄久寺四世徳光禅師の賛がある。 浄久寺は宮高盛が開いた禅宗寺院。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財（絵画）	絹本著色仏涅槃図	けんぽんちゃくしょくぶつねはんず	1幅	庄原市東城町川東	平1.3.20	絹本著色，軸装	縦163.0cm，横167.4cm	安土桃山時代の天正6年（1578），石州佐波郷（島根県邑智郡邑智町）の大龍禅寺住持が武州（武蔵，東京都・埼玉県一帯）の画工谿國(いつほ)という者に描かせた涅槃図。 釈迦の表現は，肉身は金泥(きんでい)，肉身線は朱，衣文(えもん)線は墨，着衣も金泥，金具表現の金泥は盛上彩色(もりあげざいしき)が見られる。その他，群青，緑青，丹，胡粉(ごふん)のほか多様な色彩が見られる。保存もよく，上記のように制作年代及び由来も知られ，多くの顔の表情は類型的だが，大画面いっぱいに丹念に描かれている。 千手寺(せんじゅじ)は，寺伝によると天平年間（729～766）開基の寺といわれ，永禄年間（1558～1570）に石見国邑智郡佐波郷の領主であった佐波広忠が毛利氏の麾下になって奴可郡に知行を与えられ，東城に来住し，菩提寺としたと伝えられる。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色五大明王像	けんぽんちゃくしょくごだいみょうおうぞう	3幅	庄原市東城町川西	平1.3.20	絹本著色，軸装	不動明王／縦152.4cm，横84.2cm 金剛・降三世／縦137.9cm，横55.1cm 大威・軍荼利／縦138.0cm，横55.3cm	五大明王像の五大明王とは，五大尊とも称し，彫刻絵画にあらわされ，密教修法(しゅほう)の本尊として信仰された。 中央の不動明王は，迦楼羅焔光(かるらえんこう)を負い坐している。注目すべきは大威徳明王で，通形はうずくまる水牛の背に袴坐する姿であるが，ここでは疾走する水牛の上に立つ形式をとる。各尊とも墨線のデッサンは優れている。衣紋線には肥痩のある墨線がひかれている。腕釧(うでくしろ)など金具の表現には胡粉下地の金泥(きんでい)，いわゆる盛上彩色を施している。 年代はおよそ鎌倉時代末期から南北朝時代ごろ，14世紀前半とみられ，作風も優れている。 法恩寺の由来は明かでないが，平安時代（794～1191）の開基と伝えられている。		
県	重要文化財（絵画）	絹本著色当麻曼荼羅図	けんぽんちゃくしょくたいままんだらず	1幅	庄原市東城町東城	平2.12.25	絹本著色，軸装	縦148.3cm，横153.6cm	描法や色調の点から鎌倉時代（1192～1332）の作と推定される図。浄土宗西山深草派本山の誓願寺が江戸時代の元和9年（1623）に入手し，宝暦7年（1757）西方寺の再建落成に伴い，誓願寺から寄贈されたと伝えられる。 絹地は縦方向四幅の継ぎ合わせである。図相は通例どおり中央に阿弥陀，観音，勢至（せいし）の三尊，諸菩薩，その他虚空，宝楼，宝樹，宝池などいわゆる極楽浄土の景観が表わされており，左右及び下辺の端にはそれぞれ区画を設けて説話等が描かれている。西方寺の曼荼陀羅図は，後世その中尊部の仏身，蓮台，頭光，身光部に補彩が加えられている。全体的に見てあたたか味のある色相で，菩薩像の目鼻立ちはっきりし，かつふっくらした表情をしているなど，美術的に見るべきところは多い。		
県	重要文化財（彫刻）	木造十一面観音菩薩立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1躯	庄原市実留町寺上	昭59.11.19	一木造	像高179.0cm，頭頂より顎まで48.0cm，肩幅50.0cm	顔面が少々摩滅しているのが残念であるが，眼は半開の木眼になり，当初の威厳をうかがうことができる。頭には三道を表わし，条帛（じょうはく）は左肩より右脇にかけ天衣は両肩より下腹・膝前に2段にかけ，その彫成には頭著な翻波（ほんぱ）文を彫出している。右手は垂れて著しく長く不自然に見えるが，この一種の不安定感が欠点とは感ぜられず，かえって仏像の彫法的な表情をよく表現している。左右両腕両手頸には同形の釧（くしろ）を彫作している。		
県	重要文化財（工芸品）	短刀　銘播磨守輝広寛永五年八月日	たんとう	1口	庄原市西本町	昭38.11.4	刃長29.3cm，反り0.24cm。平造り，庵棟でわずかに反りがついている。鋩えは板目柾がかり肌立ちごころに地沸えつく。刃文は小のたれに互の目乱交り，砂流しがかり沸えつき，ところどころに金筋がかる。鋩子はのたれ込み先小丸で，わずかに掃かけてやや長く返る。茎は先栗尻丸く，鑢は大筋違である。	長さ29.3cm，反り0.2cm	江戸時代の寛永5年（1628）作。 播磨守輝広は，肥後守輝広の弟子で養子となった者で，最も古い年紀は慶長15年（1610）である。寛永5年の年紀をもつこの短刀の資料的価値は高く，姿があかぬけ地刃の出来も最高のものである。		
県	重要文化財（工芸品）	太刀	たち	1口	庄原市西本町三丁目	平7.1.23	鎬造，庵棟，切先はやや小さい，刃文直刃，鑢目は浅い勝手下がり	全長91.3cm，刃長71.3cm，反り1.7cm，目釘孔1個	戦国時代の天文2年（1533）三原の刀匠正興が製作した太刀。この時代は刀が主流であり，実用刀としての太刀はまれである。保存状態もよく，美術的にも非常に価値がある。 製作者の正興は，時代，銘振り，鑢目（やすりめ）などから初代正興と考えられる。 銘太刀表「備後国三原住正興作」 裏「天文二年八月日」		
県	重要文化財（考古資料）	陽内遺跡出土遺物 縄文土器（完形復元）　1点 骨製耳飾（耳栓）1対 縄文土器片465点 けつ状耳飾片1点 石鏃7点 有柄石匕（石匙）　1点 楔形石器1点 剥片1点 石錘33点 磨り石・敲石か9点 石器破片　82点	ようちいせきしゅつどいぶつ		庄原市中本町一丁目	平15.4.21			陽内遺跡（庄原市濁川町陽内）の，縄文時代中期（5000年前）の祭祀（さいし）あるいは埋葬の場所と推定される16基の土壙（どこう）とその周辺の包含層から出土した遺物。 遺物の時代は，縄文時代中期を中心に，早期から後期まである。 完形復元された縄文土器は，口縁部から胴部下半に煤（すす）が付着するが，土壙の中をさらに横に掘りこんだ場所から出土したことから，煮沸（しゃふつ）用土器を埋葬に再利用したものと推定される。 このほか，日本海沿岸との交流を物語るサメの骨製耳飾（耳栓）なども出土し，中国山地の縄文時代中期研究の基礎資料となっている。		関連施設：庄原市歴史民俗資料館 （0824-72-1159）
県	史跡	比婆山伝説地	ひばやまでんせつち		庄原市西城町熊野，油木 庄原市比和町三河内	昭16.3.10			比婆山，別名美古登(みこと)（1264m）の山頂は，古事記にいう伊邪那美尊(いざなみのみこと)を葬った「比婆山」であるとして古来信仰の対象となって来た。 なお，周囲にブナの純林（天然記念物），イチイの群落がある。		
県	史跡	瓢山古墳	ひさごやまこふん		庄原市本町字上野山	昭17.6.9	前方後円墳	長さ41m，後円部径26m，前方部幅17.8m，後円部高さ4m	庄原市上野公園北側丘陵の頂部（比高約70m）に位置する前方後円墳で，丘陵北西にひろがる沖積地を望んで築造されたものであろう。前方部を東にむけ，全長41m，後円部径26m，高さ4m，前方部幅17.8m，高さ約3.5mで，墳丘には葺石・円筒埴輪がみられる。内部主体は不明であり，前方部がやや細長めで後の加工があるかも知れない。古墳時代中期（5世紀）の築造と推定される。従来，本古墳が庄原市域最大の前方後円墳とみられていたが，その後の調査では全長40～50mに及ぶものが数基存在することが確認され，県北部でも有数の前方後円墳が集中する地域として知られる。なかでも掛田町の旧寺古墳は，瓢山古墳の西北に沖積地をはさんで対峙し，全長61.7mに達する。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	帝釈峡馬渡遺跡	たいしゃくきょうまわたりいせき		庄原市東城町帝釈始終宇南久玉山	昭38.4.27	縄文時代		帝釈川支流の馬渡川右岸にある，石灰岩の岩陰遺跡である。昭和36年（1961）の林道工事によって発見され，これが帝釈峡遺跡群発掘調査の端緒となった。岩陰にそった長さ約10m，厚さ約5mにわたって，旧石器時代末期から縄文時代前期（約12,000～5,000年前）に及ぶ五つの文化層が確認されている。特に第五層では横剥ぎの刃器とオオツノジカが出土し，第四層では石槍・石鏃及びわが国最古の土器グループに属する繊維を含む土器，オオツノジカ，カワシンジュガイなどが出土し，旧石器時代から縄文時代への推移を よく示している。第四層のオオツノジカの出土は，それが沖積世（約12,000年以前）にも生棲し狩猟対象となったことを示し，さらにカワシンジュガイは，貝の採取の開始を暗示する。		
県	史跡	亀井尻窯跡	かめいじりかまあと		庄原市上原町	昭42.5.8	奈良時代の瓦窯跡，平窯	全長3.25m，幅最大2.0m，高さ0.3m以上	庄原市西郊の盆地北側丘陵の先端近くに位置し，窯は小さな谷に直交して築かれている。全長3.2m，最大幅2.0mで，羽子板状の平面形をなした平窯で，西側が燃焼室，東側が焼成室となり，四本のロストル（分焔柱）が残るが，両者の床面の差はなく，やや特異な形態である。窯の中から格子目・縄目のたたき目をもつ平瓦及び複弁の軒丸瓦が出土し，とくに軒丸瓦はいわゆる「水切り」をもつもので，三次市寺町廃寺に共通した形態が注目される。窯跡の西側には「法塔崎」と称せられる平担な丘陵がつらなり，中央に基壇状の高まりがあり，その縁辺から窯跡と同様な瓦が出土する。遺構の性格は明らかにされていないが，これに関連した遺跡と推定される。		
県	史跡	六の原製鉄場跡	ろくのはらせいてつじょうあと		庄原市西城町油木	昭46.7.30	砂鉄の採取から製鉄までの遺構		六の原製鉄場跡（たたら跡）は，県民の森入口の東西を渓流に挟まれた低平な丘陵上に位置する。北側には金屋子神社があり，西の渓流を約100mさかのぼった左岸には，床に木を張る鉄穴洗しの洗池2か所が残り，砂鉄の採取から製鉄までの遺構が分布する。たたら場は周辺部が削平され，高殿ならびに炉は残っていないが，その地下構造の木床と一対の小舟が明らかにされている。地下構造は，「鉄山秘書」に見られるものより簡略であり，赤目砂鉄を使用する場合の特徴であろうか。文献によると，近世末から明治時代初期まで操業されている。なお，本遺跡の西北や下流の一の原などにもたたら跡が分布しており，後者では小舟が検出された。		
県	史跡	甲山城跡	こうやまじょうあと		庄原市本郷町	昭46.12.23			戦国時代（16世紀）に出雲の尼子氏，安芸の毛利氏と肩を並べた備後国北部の有力国人領主山内首藤氏が本拠を置いた山城である。同氏は，地頭職として鎌倉時代末（14世紀前半）にこの城を築いてからのち毛利氏に帰属し，慶長5年（1600）に長門国に移るまでこの城に拠っていた。 城の北部は西城川が流れ，南は高山門田（こうやまもんでん）と呼ばれた水田をもった谷盆地に臨んでいる。この城の規模は大きく，多くの郭が各支尾根に連なっている。		
県	史跡	犬塚第一号古墳	いぬづかだいいちごうこふん		庄原市東城町新免	昭56.4.17	6世紀中頃の円墳（片袖式横穴式石室）	円墳／径約15m，高さ約3m 石室／全長3.6m，幅1.9m，高さ1.4m	犬塚第1号古墳は，直径約15m，高さ約3mの円墳で，埋葬施設に片袖式横穴式石室をもつ。石室の規模は全体に小振りの作りではあるが，正方形に近い平面の玄室をなし，大きく張りだした片袖部や狭くて短い羨道部や，一部に小口積みをなし持送りの著しい壁面の構成などは古式の特徴を示しており，6世紀前半から中葉にかかる時期と考えられる。石室内からは多数の玉類や耳環，鉄器類（剣など），須恵器が出土した。備後北部への横穴式石室の導入時期や系譜を考える上で重要な古墳である。		
県	史跡	八鳥塚谷横穴群	はっとりつかだによこあなぐん		庄原市西城町八鳥字大蔵	昭59.1.23	横穴墓群		広島県内で現在まで明らかな横穴墓は，旧比婆郡を中心に約60基があるが，本横穴群のように数基がまとまるものは，常定峰双（つねさだみねそう）横穴群（庄原市口和町），本郷横穴群（庄原市）があるが，前者は既に消滅し後者は埋没しており，現在構造の分かる横穴群としては唯一のものといえる。以上のように本横穴群は広島県における古墳時代後期（6～7世紀）における特色ある墳墓であるとともにその分布の状況からみると，山陰地方との関連を考えさせる墳墓としても貴重である。		
県	史跡	内堀の神代堰内落鉄穴跡（洗場）	うつぼりのかじろごうちおちかんなあと（あらいば）		庄原市東城町内堀字神代堰内	昭59.1.23			神代堰内落鉄穴跡は，東城盆地の北に延びる谷沿い，標高約600mの位置にあり，洗場跡の遺構をよく残している。この上流の山腹には40mの間をおいて，上の池と下の池の2ヵ所の鉄穴堤があり，この洗場まで幅約1mの鉄穴樋手（水路）が長さ約600mにわたって続いている。この鉄穴樋手沿いには鉄分の多い真砂土を採土した鉄穴洞も残っており，一応鉄穴全体の遺構が把握できる。 この鉄穴の稼業の時期は明らかでないが，安永9年（1780）の「奴可郡村々鉄穴帳」に「かじ路堰内落」として記載されており，少なくとも18世紀後半には稼業していたことが分かる。また最後は昭和19年（1944）頃まで鉄穴流しが行われたという。広島県の北部地域には，鉄穴跡が多数あり，東城町域でも鉄穴の遺構は随所に残るが，本例のように洗場跡がほぼ完全に保存されているものは，他に類例が少なく貴重といえる。		
県	史跡	旧寺古墳群	ふるでらこふんぐん		庄原市掛田町字旧寺	昭59.11.19	5世紀半ばから後半，前方後円墳1基，円墳11基	前方後円墳／全長61.7m	この古墳群の年代は，第1号古墳の形態的特徴からみて，5世紀後半頃と推定されるが，第2号古墳は一部第1号古墳造成の削平面にかかって造られているところからみると，第1号古墳より新しいものと考えられる。 備後北部の山間地帯のうち三次・庄原の両地域には，多数の古墳が分布するが，三次地域では帆立貝形古墳が多いのに対して，庄原地域では前方後円墳が集中する。本古墳群はその中で，備後北部最大規模の前方後円墳を中心とした古墳群として注目される。		
県	史跡	帝釈名越岩陰遺跡	たいしゃくなごえいわかげいせき		庄原市東城町帝釈未渡字名越	昭60.12.2	縄文時代の岩陰遺跡		遺跡は，高さ約17m，幅約30mの石灰岩の岩壁下に南面しており，東西二つの岩陰部からなる。当初は，西岩陰部は開口幅約7m，奥行き4.5m，岩廂の高さ約1.5m，東岩壁部は開口幅約2.5m，奥行き2.5m，岩廂の高さ約2mの規模であった。昭和41・42年（1966・1967）に発掘調査が行われ，柱穴列や墓壙，炉跡など検出された。遺物は，縄文時代早期～晩期（約9,000～2,300年前）にわたる土器が層位的に出土しており，なかでも後期から晩期にかけて遺構が集中している。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	史跡	五品嶽城跡	ごほんがだけじょうあと		庄原市東城町東城字五本ケ嶽山	昭62.3.30			この城跡は，備中・伯耆との国境に近い東城盆地を望む位置にある中世末期から近世初期（17世紀）にかけての山城である。五本竹城，世直(よなおし)城とも言われ，中世には宮氏，佐波氏が，次いで福島氏の城代である長尾氏が居城した。五品嶽城は，宮氏の築城による中世遺構の上に佐波氏・長尾氏による石垣，櫓，瓦葺建物などの近世初頭の技術が加えられている点にも特色がある。近世初頭以降は手が入っておらず完全に近く保存されており，学術的に貴重である。		
県	史跡	大迫山古墳群	おおさこやまこふんぐん		庄原市東城町川東字大迫山	平1.11.20	前期古墳。 第1号古墳／前方後円墳（竪穴式石室） 第2号古墳／円墳	墳丘／全長約46m 後円部／直径27m，高さ5m 前方部／幅19.5m，高さ2m 石室／全長5.14m，幅1.07～1.18m，深さ1.1m 第2号古墳／直径17m，高さ2.5m	大迫山古墳群は,2基の古墳からなり,第1号古墳は前方後円墳で,第2号は円墳（未調査）である。 第1号古墳は墳丘の全長約46m，後円部直径27m，高さ5m，前方部の幅19.5m，高さ2mである。埋葬施設は，竪穴式石室で，全長5.14m，幅1.07m～1.18m，深さ1.1mである。第2号古墳は直径約17m，高さ2.5mである。 第1号古墳は，前方部が撥形に開く。墳丘外表には葺石（ふきいし）をもち，墳丘裾には列石を巡らす。出土品には鏡（獣首鏡），勾玉，管玉，ガラス製小玉，鉄槍，鉄鏃（てつぞく），銅鏃（どうぞく），鉄剣，鉄刀，筒形銅器，矢筒，鉄手斧などがあり，鏡や矢筒は出土例が少ない。この古墳は，広島県の前期古墳を代表する一つである。		
県	史跡	小鳥原砂鉄製錬場跡（大谷山たたら）	ひとばらさてつせいれんじょうあと		（製錬場跡） 庄原市西城町小鳥原字細谷 （大鍛冶場跡） 庄原市西城町小鳥原字上坂根	平3.4.22			この遺跡は，西城町北東部の鳥取県境に近い西城川最上流域の山間部にあり，小鳥原川に注ぐ谷川の出口に開けた南向きの場所で，今は畑や荒地になっている。本遺跡は本製錬場跡として高殿，元小屋，銑（ずく）破砕工場，砂鉄再洗場，落池（おとしいけ）の5つの遺構と，製錬場から北西約500mにある大鍛冶場跡からなる。 本製錬場は，明治34年（1901）に中島久三郎の経営となり，大正11年（1922）頃まで操業された。高殿は，大正7年（1918）に屋根の葺替を行うとともに，天秤鞴（てんびんふいご）は水車鞴に代えられた。 本製錬場跡は，近世以降中国地方で発達したわが国独自な製鉄技法である"たたら吹製鉄"を代表する一つと言える。建物の現存しないのは残念であるが，写真，見取図，スケッチなどや道具類の残る貴重な例である。また，天秤鞴から水車鞴に転換しながらたたら吹製鉄の終焉を示す状況は，他に類をみない。		
県	史跡	蔀山城跡	しとみやまじょうあと		庄原市高野町新市	平4.10.29			この城跡は，高野町新市の盆地の東端に位置し，西流する神野瀬川に南流してきた毛無川が交わる上市の北東側に位置する標高775m，比高220mの尾根筋にある。 遺構は東西に延びる山頂郭群を基本とし，南郭群，北東郭群などからなる。室町時代中期（15世紀）以前に遡ぼって城主を推定する史料をもたないが，戦国時代（16世紀）には，鉄の生産，流通が盛んであった備後北部から出雲南部にかけての山間地域に大領域を領有していた多賀山氏の本城であった。山陰側の尼子氏と山陽側の大内氏，続く毛利氏の両勢力が拮抗する境目領主の拠城として注目される。		
県	史跡	唐樞古墳	からびつこふん		庄原市川西町字唐樞	平5.2.25	前方後円墳（横穴式石室）	全長約45m， 後円部／直径29～31m，高さ約6m（南側）， 前方部／長さ約16m，先端部幅約17m，くびれ部幅約14.5m，高さ約2m	この古墳は庄原市を東から西に貫流する西城川が，旧高村の低平な河谷平地から峡谷にかかる地点にあり，西城川右岸にむけて張り出す低丘陵上に造られている。本古墳は，丘陵先端にちかい緩傾斜面に平行して築成された前方後円墳で，古墳時代後期（6世紀後半）のものである。主軸を東北東ー西南西におき，丘陵先端側に前方部をつくる。全長48.6m，後円部の直径28.8m，高さは南側で約6mである。主体は後円部につくられた横穴式石室で，北ー南に主軸をとり，南に開口する。 広島県における前方後円墳のなかで，横穴式石室を内部主体するものは，きわめて少ない。庄原市域に限っても約30基の前方後円墳のうち，本古墳と投石古墳（全長約17m）の2基にすぎない。本古墳の横穴式石室も全長10mをこえる大形の部類に入り，貴重である。		
県	天然記念物	上高野山の乳下ワイチョウ	かみたかのやまのちちさがりいちょう		庄原市高野町新市字上市	昭12.5.28			本樹は県内第1位のイチョウの巨樹で，多数の乳柱（乳房状突起）が垂れ下がる雌樹である。乳柱は局部的な栄養過剰によって生ずるといわれ，実がならない老木に多く見られるが，本樹のような実のなる雌株にできることもある。 天平元年（729），建御雷神（たけみかづちのかみ）をこの地に勧請したとき，神木として植えられたと伝えられる。		
県	天然記念物	ゴギ	ごぎ		庄原市西城町熊野	昭26.11.6			中国山地の渓流に生息するゴギは，日本固有の高山魚イワナの一種で，中国地方の特有種である。イワナ属のものは北方水域に分布の中心をもつ魚族である。イワナは本州では高山の渓流に生息するが，ゴギはこの属のうちで比較的，低高度のしかも最も南方に分布する種で，地質時代寒冷期の残存種として陸封されたものとされている。体長30cmに達し，中国山地の源流冷水域に限って生育し，大きい黄色斑を体側頭上にもつ魚類である。		
県	天然記念物	熊野神社の老杉	くまのじんじゃのろうすぎ		庄原市西城町熊野	昭27.2.22			比婆山山麓にある熊野神社は古くから多くの人々の信仰を集めており，その社叢は，亭々たる老杉によって形成されている。目通り幹囲5.0m以上のものが11本を数えており，そのうち最大のものは8.1m，続いて7.3mと，いずれもスギとしては県内有数の巨樹が見られる。		
県	天然記念物	蘇羅座神社のスギ	そらひこじんじゃのすぎ		庄原市本村町本	昭28.4.3			本神社は本村の集落の奥まった山ぎわにあり，その境内に主としてスギからなる見事な社叢が見られる。境内には目通り幹囲2.0m余に達する巨杉が8本見られるが，参道の左右にある2株は特に巨木である。向って右側のスギが最大で胸高幹囲5.5m，左側のスギは5.2mに達する。根回り周囲はほとんど優劣なく，共に7.6mである。他のスギもこの2株よりもわずかに小木というだけで，この付近では稀に見るスギの巨樹叢である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	東城川の甌穴	とうじょうがわのおうけつ		庄原市東城町東城川河床	昭29.4.23			急流の河底の岩盤上に天然につくられた甌穴（おうけつ）は，地質的にも地形的にもいろいろの自然条件に支配され，長年かかってつくられるものである。東城川の甌穴は，第三紀中新世（2300万～500万年前）の泥岩・砂岩・礫岩などの層からなる河底に，約3.5kmにわたって直径20cmから2mに及ぶ30個以上の甌穴群が8群存在しており，このうち東城川大橋から上流400m，下流300mが指定されている。甌穴の分布が他地域に比べて広域で，量・質共に豊富で学術的に価値の高いものである。		
県	天然記念物	上湯川の八幡神社社叢	かみゆかわのはちまんじんじゃしゃそう		庄原市高野町上湯川字御所之沖	昭34.10.30			本社叢は県道を背にする平坦地に展開し，地積は比較的狭いが，スギを主として若干のモミ・カヤなどの針葉樹と，エノキ・ヤマモミジ・ミズキなどの落葉広葉樹からなる当地方の代表的な社叢である。胸高幹囲2m以上の樹木が45本あり，なかでも，胸高幹囲，及び樹高がそれぞれ6.0m，約36mのモミ，7.0m，約33mのスギは県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	南の八幡神社社叢	みなみのはちまんじんじゃしゃそう		庄原市高野町南字土居沖，字大鬼山	昭34.10.30			本社叢は，社殿周辺部と延長500mに及ぶ参道部の二部分からなる。社殿付近には胸高幹囲2m以上のスギ・モミ・クロマツ・ヤマモミジなど約20本がほぼ一団をなす。参道にも同様な幹囲のスギ・モミ・アベマキ・クロマツなどが並木をなしており，胸高幹囲2m以上の大樹だけでもその数は50本の多きに達する。わけてもモミは胸高幹囲5.02m，4.81m，アベマキは4.05mに達する県内有数の巨樹である。 元亨元年（1321），薗山(しとみやま)城の城主山内首藤通資(やまのうちすどうみちすけ)が，鶴が岡八幡宮を当地に祭るに当たって，植樹したと伝えられる。		
県	天然記念物	円正寺のシダレザクラ	えんしょうじのしだれざくら		庄原市高野町新市字荒神谷	昭34.10.30			シダレザクラは，その特異な樹形のために古来各所の社寺庭園などに栽培され名木となっているものが多いが胸高幹囲3mを超すものは少ない。本樹2株はシダレザクラとして県内有数の巨樹としてだけでなく，枝条が四方に展開して辺り一面をおおい，名木としてみるべきものがある。明暦3年（1657）住持乗覚（じょうかく）法師（円正寺11代）が植栽したと伝えられる。		
県	天然記念物	金屋子神社のシナノキ	かなやこじんじゃのしなのき		庄原市高野町新市字新市	昭34.10.30			シナノキは日本及び中国に自生する落葉高木であるが，特に東北地方と北海道に多い。その樹皮を布や綱の材料として利用するため，巨樹は極めて少ない。本樹は，主幹の胸高幹囲5mに達し，稀にみる巨樹である。地上約3m高で折損しているが，これに代わる大支幹が樹高約10mに達している。		
県	天然記念物	西城浄久寺のカヤ	さいじょうじょうきゅうじのかや		庄原市西城町粟田	昭44.4.28			本樹は，樹高約22m，胸高幹囲3.98mで，主幹が直立し，枝の発達もよく，樹勢はすこぶる旺盛で多数の果実をつける。カヤとしては県内有数の巨樹である。なお本樹は永禄年間（1588～1570），大富山城主宮高盛が菩提寺を建立した際に植樹したと言われる。		
県	天然記念物	横目堂のイチイ	よこめどうのいちい		庄原市川西町	昭48.3.28			本樹は，横目堂の前庭の小高いところに生育し，樹高約7m，胸高幹囲1.9mである。当初はキャラボク型に仕立てられたもので推定されるが，現在は北面から東南にまわる部分を占める半球形の樹冠を呈している。樹幹上には多数のコケ類が着生している。本樹は人里近くに生育するイチイとしては県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	諏訪神社のシラカシ林・コケ群落	すわじんじゃのしらかしばやし・こけぐんらく		庄原市高門町字諏訪の前	昭48.3.28			本社叢は中国地方の内陸部を代表する常緑広葉樹のシラカシのほぼ純林とも言えるもので，その外形はほぼ半球状を呈し，周辺の一部にはマント群落がよく発達している。社叢内部に発達するコケ類は50数種に上り，社殿周辺の広場及び巾2～3mの環状道路に発達するコケ群落は，人為的に発生したものとはいえ実に見事なものである。		
県	天然記念物	板井谷のコナラ	いたいだにのこなら		庄原市東城町小奴可字板井谷	昭51.6.29			コナラは日本と朝鮮半島に分布する落葉広葉樹である。本樹は，樹高約24m，胸高幹囲4.28mで，地上2～5m高のところで14本の支幹に分岐し，最下の二支幹はほとんど水平に，他の支幹は斜め上方に伸びて，独特の枝振りをした壮大な樹冠を形成している。コナラとして県内有数の巨樹である。なお，本樹の根元に愛宕神社の小さな祠があり，たたら防火の神木としてあがめられてきたことは，民俗学的にも興味深い。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	小奴可の要害桜	おぬかのようがいざくら		庄原市東城町小奴可字要害	昭51.6.29			本樹の樹種は，エドヒガンで，ウバヒガン又はアズマヒガンとも呼ばれ，本州・四国・九州・朝鮮半島南部及び中国中部に分布する。本樹は樹高約17mで，サクラとして県内有数の巨樹である。付近に海抜563mの山城跡（亀山城跡）があり，西側の麓が居館跡と伝えられ，その一角に本樹があるところから，地元の人々に「要害桜」の名で呼ばれている。		
県	天然記念物	湯木のモミ	ゆきのもみ		庄原市口和町湯木	昭53.1.31			本樹は，海抜305mの山麓部に位置し，モウソウチク林内に高くそびえている独立樹(樹高約32m，胸高幹囲6.1m)で，遠くからでもよく目立つ。主幹は南東に傾き，地上から10mくらいのところから主な枝が出始め，広卵形の樹冠を形成する。モミは一般に短命で100年から200年で枯死する場合が多いが，本樹は優に300年以上経ていると思われ，モミとしては全国有数の老樹である。		
県	天然記念物	大屋のサイジョウガキ	おおやのさいじょうがき		庄原市西城町大屋	昭53.1.31			サイジョウガキは東広島市西条町寺家長福寺に原木があったと伝えられているが，別の西城町に本樹のような大樹が存在することは興味深い。 本樹は樹高17mで，主幹は地上から4m辺りで3本の支幹に分かれ，横径20m内外の樹冠部を形成していたが，平成3年（1991）の台風により折損し，現在は主幹部だけが残っている。カキノキとして県内有数の巨樹である。		
県	天然記念物	北村神社の巨樹群	きたむらじんじゃのきょじゅぐん		庄原市西城町三坂	昭53.10.4			道後山の麓にある北村神社境内（413㎡）には見事な巨樹群が形成されている。イチイ・スギ・トチノキ・エノキの4樹は稀にみる大木で，樹高は，イチイ約17m，スギ約27m，トチノキ約22m，エノキ約22m，クヌギ約23m，オオモミジ約20m，胸高幹囲は，イチイ4.4m，スギ3.85m，トチノキ4.15m，クヌギ1.96m，オオモミジ2.35mである。樹齢はいずれも300年を超えるものと推定される。		
県	天然記念物	平子のタンバグリ	ひらこのたんばぐり		庄原市西城町平子	昭53.10.4			クリは日本特産の落葉高木で，北海道西南部から九州屋久島に至る山地に分布している。タンバグリは丹波国（現兵庫県）原産の果実の大きい品種で，県内でも各地に植栽されている。本樹は樹高約15m，胸高幹囲5.1mで，主幹は地上4mから分枝が始まり，よく繁った円い樹冠を呈している。樹勢は極めて旺盛で着果も良好である。クリとしては全国有数の巨樹である。		
県	天然記念物	領家八幡神社の社叢	りょうけはちまんじんじゃのしゃそう		庄原市総領町下領家	平1.11.20			旧総領町役場の県道を東へ約600m行った所の山麓（海抜約280m）に領家八幡神社があり，その背後の南西向き急斜面によく茂った常緑広葉樹を主とする社叢が発達している。シラカシが優占するが，場所によっては針葉樹のカヤがかなり顕著に出現する。オオモミジ，アベマキ，シデ類などの落葉広葉樹も混生する。下層にはヤブツバキとアオキが多い。 広島県内陸地域にある社叢にはシラカシがよく出現するが，本社叢はそのシラカシが顕著に優占する森林で，本地方の山腹傾斜地に発達するシラカシ自然林の典型的な姿を保っている。シラカシの稚・幼樹も多く生じており，持続性のある安定群落と考えられる。胸高幹囲2mを超えるシラカシの大木が30本も見られることは，本社叢が昔から人為の影響をあまり受けないで保護されてきたことを示している。		
県	天然記念物	下領家のエドヒガン	しもりょうけのえどひがん		庄原市総領町下領家	平3.12.12			本樹は，犬か丸山（標高620m）の南方で，海抜約530mの所にある。本樹は，樹高約20m，胸高幹囲6.67mである。主幹は地上2.2mで南・北の二支幹に分かれるが，南側の支幹は枯損し，長さ約3.5mの根元部が残っているにすぎない。北側の支幹は地上約4m辺りでさらに二岐するが，片方の枝は枯れ，長さ3mばかりが残る。樹幹にはオシャグジデンダ，ノキシノブ，コケ類が着生している。 エドヒガンは，日本（本州，四国，九州），朝鮮半島南部，中国大陸中部に分布するサクラで，日本の各地に巨樹名木が知られている。しかし，それらの大部分は中部地方以北であり，中国地方で，本樹のような，全国的にみても有数の巨木が見られることは珍しい。		
県	天然記念物	千鳥別尺のヤマザクラ	ちどりべっしゃくのやまざくら		庄原市東城町千鳥字別尺	平6.2.28			東城町の北東部にある寺ヶ成山（922.2m，集落との比高300m内外）の南東山麓，海抜650m辺りの，田畑の間に残された草地にヤマザクラの巨樹が生育しており，遠方からでもその全形を見ることができる。本樹は，樹高約27mで，胸高幹囲4.6mで，主幹は地上2mで東・西の2支幹に分かれ，西支幹はさらに1m上で2岐する。それはさらに密に分岐して，ほぼ球状の整った樹冠を形成している。 ヤマザクラは，本州，四国，九州，朝鮮半島南部に分布し，広島県内でも極く普通に見られる。エドヒガンは巨樹が少なく，胸高幹囲4.5mを超えるものは全国的にもあまり多くない。		
県	天然記念物	森湯谷のエドヒガン	もりゆだにのえどひがん		庄原市東城町森字細谷	平6.2.28			東城町西部に海抜1009.4m（集落との比高400m内外）の飯山がある。その北東山麓，海抜640m辺りの所に本件のエドヒガンが生育している。本樹は，樹高約25m，胸高幹囲5.06mで，主幹は地上1.5mで南・北の2支幹に分かれ，南支幹はさらに1m位上で2岐し，北支幹は3m位上で水平に近い大きな横枝を出している。樹冠はほぼ球状で，よく発達している。 エドヒガン（ウバヒガン，アズマヒガンとも呼ばれる。）は，本州，四国，九州，朝鮮半島南部及び中国大陸中部に分布するサクラである。広島県内では，自生は少ないが，植栽されて育ったものが各地にあり，特に県東部にいくつかの大木が見られるが，胸高幹囲5mを超えるエドヒガンは，西日本では少なく，本樹は学術上貴重な存在である。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	天然記念物	帝釈始終のコナラ	たいしゃくししゅうのこなら		庄原市東城町帝釈始終 字岩屋ケ谷山	平6.2.28			丘陵南西斜面，海抜約530mのところに樹高約30mの大きな樹冠を広げ，一際目立って生育している。主幹はやや南東に傾き，地上4.5mで2支幹に分かれる。主幹は，両側に浅い溝がある楕円柱状で，2本の木が癒着したようにも見えるが，確定はできない。 コナラは日本（北海道，本州，四国，九州）と朝鮮半島に広く分布し，広島県でもごく普通に見られる落葉広葉樹である。昔から，薪炭材，シイタケ栽培のほだ木，その他の用材として利用されてきたので，全国的にも大木は少ない。		
県	天然記念物	新免郷谷のエノキ	しんめんごうだにのえのき		庄原市東城町新免字郷谷	平6.2.28			丘陵の北東側斜面（海抜約380m）にエノキの巨樹が生育している。本樹は，樹高約28m，胸高幹囲5.2mで，主幹は，やや南に傾き，地上2.2m辺りで東・西の2支幹に分かれる。西側支幹はすぐまた2岐し，東側支幹はさらに2mばかり上で3岐して，よく茂った壮大な樹冠を形成している。 エノキは東アジアに広く分布する落葉広葉樹で，日本では本州，四国，九州の海抜1000m以下の地域にごく普通に見られる。本件のエノキについては，自然生か植栽か不明であるが，付近に「下峠荒神」と呼ばれる小祠があるので，それとかかわる神木として保護されてきたのであろう。		
県	天然記念物	上市のイロハモミジ群	かみいちのいろはもみじぐん		庄原市総領町字稲草	平6.10.31			上市の集落の北側，国道との比高約10m，海抜280m内外の南向き山裾に臨川庵（法福寺）跡があり，その西方約100mに共同墓地がある。この地域にイロハモミジがそれぞれ16株（以上墓地），2株（寺跡），計18株生育している。 イロハモミジ（一名タカオモミジ）は福島県以西の本州，四国，九州，朝鮮半島南部に分布する落葉広葉樹で，庭園樹としても広く植栽されている。成長が遅いので胸高幹囲2mを超えるものは大木といえる。胸高幹囲3m以上の木は全国的にも少なく，変種のヤマモミジ，オオモミジを含めても10余件が記録されているにすぎない。「上市のイロハモミジ群」は，最大のものは胸高幹囲3.25m，そのほか胸高幹囲2mを超えるものを9株も含み全国でも稀にみる大木群である。		
県	無形文化財	日本刀製作技術	にほんとうせいさくぎじゅつ		①山県郡北広島町有田 ②庄原市西城町西城	①平18.4.17 ②平28.10.27（保持者の追加認定）			現在の日本刀の形態は平安時代後期に現れ，その姿形の美しさと地鉄（じがね）の鍛え（きたえ）肌や刃文（はもん）の多様さから，鉄の芸術品として高く評価されている。 本県でも，鎌倉時代後期には刀匠の存在が確実であり，以来７００年以上にわたり途絶えることなく，多くの刀匠が工夫と鍛錬を重ね，作品を作りあげている。 現在，保持者として，北広島町の三上孝徳（刀匠銘　貞直）氏，庄原市の久保善博（刀匠銘　善博）氏が認定されている。		
県	無形民俗文化財	神楽―入申，塩浄，魔払，荒神，八花，八幡―	かぐら―いれもうし，しおぎよめ，まはらい，こうじん，やつはな，はちまん―		庄原市高野町 庄原市比和町	昭34.1.29			所伝によるとこの神楽は出雲神楽を伝えたものと言い，舞の形や音楽の調子，さらにこの神楽を「七座神事」と称していたのは，佐陀（さだ）神社の「七社神楽」とつながりをもつなどと言われるが，この七座の神楽はむしろ東城地方の荒神神楽の方に古さがあり，東城とのつながりが濃いと思われる。 神楽は7年及び13年の年番には盛大に行われるが，舞人がすべて神職であることは大きな特色で，舞は素朴古雅の趣があり，はやしも太鼓・笛・手拍子などに斎庭神楽の古型を伝えている。		
県	無形民俗文化財	供養田植	くようたうえ		庄原市比和町	昭46.4.30			供養田植は，大山信仰圏内に行われる信仰と音楽と労働を要素とする大がかりな神仏混淆の儀式田植である。比和の供養田植の特色は，神降ろしの歌曲としての「大拍子」を伝承していることである。備後系で行われる楽器の大太鼓は，すべて鼓面を上から打つのであるが，大拍子の歌曲が残っている比和・高野地方では，儀式田植に限って上から打つ太鼓を使用せず，安芸系の腰鼓を用いている。このことは，かって備後・備中・伯耆地方でも腰鼓を使用していたが，仕事田植の進捗を促すため，おそらく明治期前後に今日見るような上下に打つ大太鼓にかわったものと思われる。		
県	無形民俗文化財	神弓祭	しんきゅうさい		庄原市西城町	昭54.3.26			この神弓祭は古くは弓神事式とか鳴弦神事式とも言われ,俗称では「弓をふせてもらう」とも言っている。古来,奴可郡のうち八幡・小奴可・西城・美古登・八鉢の5地区に伝承されていたが,現在は西城町（旧西城・美古登・八鉢）のみである。 祭場は,当屋の奥の間に神殿を設け,注連飾り（しめかざり）をし,千道を引き,祭壇の中央に斗枡を据えて神座とし,神饌を供えて遣幣（けんべい）などを飾り,その前方の掘輪に弓を結んで弓座とする。弓座の後方に太鼓・笛・手拍子の諸役が坐り斎主は二本の打竹で弓を打ち鳴らしながら祭文を奏上,楽座の者は神歌を斉唱して奏楽する。 弓の弦を打ち鳴らして祭文を語り,神楽歌を歌って奏楽する民俗芸能は,古くは備後一国で行われていたものであるが,現在は上下町井永の弓神楽と西城地区の神弓祭に残るのみで貴重である。		
県	無形民俗文化財	三上神楽	みかみかぐら		庄原市	昭60.3.14			三上神楽は，庄原市にある神楽で，広島県神社庁庄原支部に所属する22社の神職によって行われる。市内の神社39社ならびに口和町の神社2社の例祭日の前夜，または，7年，13年，33年の年番日に舞われるほか，臨時に豊年の感謝，畜産繁栄の祈願，社殿落成の祝慶の際にも舞われる。上演可能の演目は「打立」，「指紙」，「舞の一」（神迎え），「魔駈」（魔払い），「御座」等の儀式舞のほか，「御神」（神楽奉納の神社の御神祭に縁のある神楽），「天の岩戸」，「荒神」（二神の天安河の誓約），「四剣」（八つ花）「大山」，「八戸」等の能舞であるが，特に儀式舞を重んじているのが特徴である。囃子の調子にはサンヤ調子，清メ調子，手刀調子，姫調子，早調子，神楽調子，荒神調子等があるが，すべて十秒十二拍の緩やかな調子が基調であるのも，そのせいと思われる。		
国	登録有形文化財（建造物）	三楽荘本館	さんらくそうほんかん	1棟	庄原市東城町	平23.1.26	木造2階建，瓦葺，建築面積282㎡		角地に東を正面にして建ち，桁行18m，梁間17m，木造二階建。入母屋造桟瓦葺で，両妻に小破風を重ねる複雑な屋根をつくる。一階は正面に出格子をたて，二階は出桁造の軒まで黒漆喰で塗り込め，虫籠窓を穿つ。重厚で，風格ある大型町家である。 明治24年建設。		
国	登録有形文化財（建造物）	三楽荘離れ	さんらくそうはなれ	1棟	庄原市東城町	平23.1.26	木造2階建，瓦葺，建築面積124㎡		主屋の北側に建ち前後に庭を配する。桁行13m，梁間9.9m，木造二階建，入母屋造桟瓦葺で，一階周囲の屋根を下屋とする。東面は二階に木瓜形の格子窓を穿ち，庭園に面する西面は開放的なつくりとする。内部意匠も優雅な接客施設である。 明治42年建設。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	三楽荘茶屋	さんらくそうちゃや	1棟	庄原市東城町	平23.1.26	木造平屋建，瓦葺，建築面積10㎡		離れ北西角に廊下を介して建つ。桁行4.1m，梁間2.4m，木造平屋建，西面入母屋造桟瓦葺である。西半を二畳茶室として，茶室北面の西側に地袋，東側に棚を備える。東半は前室及び廊下とする。庭園に面する南・西面を大きく開放した近代茶室。 昭和前期建設。		
国	登録有形文化財（建造物）	三楽荘土蔵	さんらくそうどぞう	1棟	庄原市東城町	平23.1.26	土蔵造2階建，瓦葺，建築面積34㎡		敷地西寄りに建ち，桁行6.9m，梁間4.9m，土蔵造二階建，切妻造桟瓦葺である。内部は一階を土間，二階を居室とする。外部は漆喰塗で腰を竪板張とし，一階上部の水切り瓦と二階両妻の山型の水切り瓦が特徴的で，敷地背面の景観を引き締める。 明治26年建設。		
国	登録有形文化財（建造物）	三楽荘門及び塀	さんらくそうもんおよびへい	1棟	庄原市東城町	平23.1.26	門　木造，瓦葺，間口1.8m 塀　木造，瓦葺，延長13m		敷地の東辺，離れ前面に建つ門と塀である。門は一間腕木門，切妻造桟瓦葺で，方立をたてて板戸を吊る。塀は，延長13m，両下造桟瓦葺で，腰に幅広の榧板を横張し，上部を土壁とする。いずれも榧の良材が用いられ，格調のある屋敷構えをつくる。 昭和前期建設。		
国	登録有形文化財（建造物）	ヤマモトロックマシン（旧山本鉄工所）第一工場	やまもとろっくましん（きゅうやまもとてっこうしょ）だいいちこうじょう	1棟	庄原市東城町東城	平28.2.25	木造平屋建，鉄板葺	建築面積1,421㎡	中国山地に開けた市街地に敷地を構える。削岩機製造で発展した。第一工場は中心となる木造建築。桁行78mと長大で，採光のため梁間を3スパンに分けて中央を高め，さらに越屋根を設けて工夫する。効率的な作業空間の実現により，機能美を備える。		
国	登録有形文化財（建造物）	ヤマモトロックマシン（旧山本鉄工所）第二工場	やまもとろっくましん（きゅうやまもとてっこうしょ）だいにこうじょう	1棟	庄原市東城町東城	平28.2.25	木造平屋建，鉄板葺	建築面積521㎡	第一工場の北方に直交して建つ。桁行約44mで，小屋にはキングポストトラスを架け，越屋根を設ける。南面と両側面には上下窓を並べて採光する。外壁はモルタル仕上げとし，腰には洗出し仕上げを施す。第一工場とともに工場の中核をなす建築。		
国	登録有形文化財（建造物）	ヤマモトロックマシン（旧山本鉄工所）仕上げ工場	やまもとろっくましん（きゅうやまもとてっこうしょ）しあげこうじょう	1棟	庄原市東城町東城	平28.2.25	木造平屋建，鉄板葺	建築面積417㎡	第一工場の東方に並行して建つ。桁行38mで，小屋にはクイーンポストトラスを架け，越屋根を設ける。南妻面には上部を欠円アーチ形とした窓を設け，東西面には上下窓を並べて洋風意匠とする。洋風意匠で採光を工夫した戦前期地方工場建築の一例。		
国	登録有形文化財（建造物）	ヤマモトロックマシン（旧山本鉄工所）青年学校	やまもとろっくましん（きゅうやまもとてっこうしょ）せいねんがっこう	1棟	庄原市東城町川西	平28.2.25	木造2階建，瓦葺	建築面積309㎡	敷地南寄りに建つ。木造2階建で，屋根は半切妻とする。1階を1室の倉庫，2階を学校として使った。2階は，中廊下を通して左右に3室ずつ並べ，4学年分の教室を設ける。製造現場で中心的な役割を果たした養成工に，教育を行っていたことを示す遺構である。		
国	登録有形文化財（建造物）	ヤマモトロックマシン（旧山本鉄工所）便所棟	やまもとろっくましん（きゅうやまもとてっこうしょ）べんじょとう	1棟	庄原市東城町東城	平28.2.25	木造平屋建，鉄板葺	建築面積18㎡	第一工場の西方に並行して建つ。従業員用の便所として建てられた。西に大便所，東に小便所と手洗いを並べる。耐寒のためガラス窓を二重にしたり，建設当初より水洗式としたりするなど，当時，先端の技術を集め，衛生的に配慮して建てられたことを示す。		
国	登録有形文化財（建造物）	ヤマモトロックマシン（旧山本鉄工所）自治寮家族棟	やまもとろっくましん（きゅうやまもとてっこうしょ）じちりょうかぞくとう	1棟	庄原市東城町川西字新丁416-1他	平28.2.25	木造3階建，瓦葺	建築面積314㎡	工場群から道を挟んで南に自治寮施設群が残る。家族棟は西寄りに南北棟で建つ。木造3階建で，屋根を半切妻とし，ドーマー窓を載せて洋風外観とする。内部は片廊下とし1・2階を和室の居室，3階は1室の会議室とする。職住分離した近代産業社会の有様を示す。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	ヤマモトロックマシン（旧山本鉄工所）自治寮独身棟	やまもとろっくましん（きゅうやまもとてっこうしょ）じちりょうどくしんとう	１棟	庄原市東城町川西	平28.2.25	木造２階建，瓦葺，地下室付	建築面積407㎡	敷地東側に南北棟で建つ。木造２階建で，屋根を半切妻とし，桁行59mの長大な平面を持つ。西に片廊下を通し，東に押入れ付の10畳居室を並べる。廊下，居室とも開口を広くとる。戦中から高度成長期にかけての第２次産業を支えた職員住宅である。		
国	登録有形文化財（建造物）	ヤマモトロックマシン（旧山本鉄工所）自治寮食堂・娯楽室棟	やまもとろっくましん（きゅうやまもとてっこうしょ）じちりょうしょくどう・ごらくしつとう	１棟	庄原市東城町川西	平28.2.25	木造２階一部平屋建，瓦葺	建築面積281㎡	家族棟と独身棟の間に建つ。木造２階建で南北棟の食堂及び娯楽室に，平屋建で東西棟の炊事場及び炊事夫部屋が附属する。１階食堂，２階娯楽室とも１室の大空間とし，プレス成型された鋼製の天井板を張る。戦前期における自治寮の生活の様相を伝える。		
国	登録有形文化財（建造物）	瀧口家住宅裏門及び土塀	たきぐちけじゅうたくうらもんおよびどべい	１棟	庄原市春田町	平30.3.27			山陰と山陽を結ぶ交通の要衝に建ち，明治35年に診療所を開業した。長屋門は院長の居室や入院施設をもち，併設する診療所と共に明治後期の地方病院の形式をよく伝える。主屋は敷地中央に建ち，接客用の座敷と私的な居室を前後で区分しており，式台玄関の虹梁や出格子の意匠をみせ，座敷飾りなど随所に大工の技量が発揮される。主屋の西方に渡り廊下を介して客殿が建つ。客殿は平屋建であるが建ちが高く，入母屋造の屋根に鯱（しゃち）瓦を載せ重厚な外観をみせる。納戸は主屋南に建つ寝室がある家族用の建物で，便所や風呂も往時の姿をよく留める内向きの施設。土蔵は敷地東面に建ち，土塀と一体となり前面道路からの景観を構成する。納屋は土蔵の南に建ち，往診用馬車の厩（うまや）や養蚕の作業所として使用され，栗（くり）材の柱に地域性を示す。木小屋は納屋に直交して建ち，薪炭置き場や漬物小屋，養蚕に使用され雪国における生活を支える施設。中門及び袖塀は主屋の玄関前と座敷や客殿の庭園を画す。裏門は敷地南面に開き，敷地を囲む土塀等は総延長192メートルにも及び，亀甲積の石垣上に建ち，歴史的な景観を形成している。		明治35年頃
国	登録有形文化財（建造物）	瀧口家住宅木小屋	たきぐちけじゅうたくきごや	１棟	庄原市春田町	平30.3.27					大正期
国	登録有形文化財（建造物）	瀧口家住宅客殿及び渡廊下	たきぐちけじゅうたくきゃくでんおよびわたりろうか	１棟	庄原市春田町	平30.3.27					大正15年頃
国	登録有形文化財（建造物）	瀧口家住宅主屋	たきぐちけじゅうたくしゅおく	１棟	庄原市春田町	平30.3.27					大正２年
国	登録有形文化財（建造物）	瀧口家住宅中門及び袖塀	たきぐちけじゅうたく	１棟	庄原市春田町	平30.3.27					大正２年頃
国	登録有形文化財（建造物）	瀧口家住宅土蔵	たきぐちけじゅうたく	１棟	庄原市春田町	平30.3.27					大正期／昭和後期改修
国	登録有形文化財（建造物）	瀧口家住宅長屋門及び診療所	たきぐちけじゅうたく	１棟	庄原市春田町	平30.3.27					明治35年頃

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	登録有形文化財（建造物）	瀧口家住宅納屋	たきぐちけじゅうたく	1棟	庄原市春田町	平30.3.27					大正期
国	登録有形文化財（建造物）	瀧口家住宅納戸	たきぐちけじゅうたくなんど	1棟	庄原市春田町	平30.3.27					明治後期
国	登録有形文化財（建造物）	ヤマモトロックマシン（旧山本鉄工所） 旧本社事務所兼主屋	やまもとろっくましん（きゅうやまもとてっこうしょ）しあげこうじょう	1棟	庄原市東城町東城	※未告示	木造二階建、瓦葺	建築面積258.678㎡	東城の新町筋に西面して建つ削岩機製造会社の旧本社事務所兼主屋。 和前期築、昭和中期改修と伝わる。二階建片寄棟造桟瓦葺で外壁モルタル掻落仕上、腰を石貼。二階に出窓を張出し、丸窓など幾何学的意匠で飾る。正面側は事務所に改修し、背面側に和室の居住部を残す。独特な外観が通りの景観を形成している。		（令和6年7月19日登録答申）
国	登録有形文化財（建造物）	ヤマモトロックマシン（旧山本鉄工所） 旧研究室棟	やまもとろっくましん（きゅうやまもとてっこうしょ）しあげこうじょう	1棟	庄原市東城町東城	※未告示	木造平屋、瓦葺	建築面積130.680㎡	事務所兼主屋の東に位置する削岩機製造会社の旧研究開発棟。昭和前期築と伝わる。切妻造平入桟瓦葺東西棟で、側廻りに上部半円アーチの縦長窓を開け、外壁モルタル掻落仕上。内部中央は板敷の研究室で、北と南の土間通路沿いにそれぞれ戸口と窓を開ける。削岩機製造の起点となった洋風の研究室棟である。		（令和6年7月19日登録答申）
国	記録記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	比婆の荒神神楽	ひばのこうじんかぐら		庄原市東城町	昭和46年（1971）11年11日（選択） 昭和54年（1979）2月3日（国指定）			比婆荒神神楽は，名の本山三宝荒神に奉納する祖霊信仰の神楽といわれ，同様な神楽は現在，備後では比婆・神石の二郡，備中では川上・阿哲・上房の三郡に残っている。なかでも東城。西条地方に伝わる比婆荒神神楽は神楽の古いかたちを残しており，貴重である。 本山三宝荒神は直接的な産土神としての性格をもち，さらに村にはそれらを包摂する村全体の産土神として氏神（鎮守社）が存在していたようで，本山三宝荒神に対しては，氏神に対するおおらかな信仰とはちがったきびしいおそれをもっていたようである。本山三宝荒神への毎年の荒神祭に奉納する小神楽と，式年の大神楽は，名内の人びとがもっとも盛大に，もっとも厳粛に行われてきた。 神役中の七座神事（「打立」「曲舞」「指神」「榊舞」「蕨蓙舞」「猿田彦の舞」「神迎えの舞」）の中の舞はいわゆる神事舞で，それぞれが古い手ぶりをそのまま伝えているといわれる。		
国	記録記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財	大山供養田植			庄原市東城町	昭和43年（1968）1月12日（県指定） 昭和50年（1975）12年8日（選択）			伯耆大山を中心とした，伯耆・出雲・美作・備中北部・備後北部一帯の地方は，大山の大神山神社と天台宗大山寺とが神仏習合して生じた，牛馬安全の神，大山智明大権現（通称大仙さん）への信仰がさかんであった地方である。この東城の地方でも，旧村単位のどの地区にも，高い山の上に大仙神社が勧請され，毎年春や秋に大仙祭りが賑やかに行われてきた。◎　大山供養田植は，定期的に毎年行われる春秋の大仙祭りとは別に，随時，奇特な施主が主催して，不慮の死にあった牛馬の霊を供養し，現在飼育している牛馬の安全と五穀豊穣・家内安全を祈念する大規模な祭りで，田植おどり・供養行事・しろかき・太鼓田植・お札納めの五行事で構成されている。		